

トータルフィジカルレスポンス・ジャズチャンツは役に立つ指導法か？

—その指導法と考え方と指導の実際から—

安心院幸恵

1. なぜ日本人は英語ができないのか

日本において英語を流暢に話せる人は他の国に比べると圧倒的に少ない。なぜなら日本の教育は英語でコミュニケーションを行うことに適した勉強法ではないからだ。日本の英語教育において英語を日本語に訳す、文法を確認する、という教科書を参照するデスクワークに重点がおかれている。日本人はまず、日本語に訳すことを重視したり、本来英語や日本語の言語はコミュニケーションをとるために使われているが、相手に「伝えよう」と思って英語を使っていなかったり、そしてなにより、膨大な文法のカリキュラムを消化する事に精一杯でリスニングや会話時間を割けない、これらの要素が日本人の英語力を低下させていると思われる。英語は難しいというネガティブな先入観も日本人の英語力が上がらない理由の一つである。また Asano は英語の上達方法として「教科書ではなく、テレビ番組、雑誌など「生きている」英語を使うこと」と言っている。文法を学ぶにおいて教科書は適している教材かもしれないが、英語でコミュニケーションをとる、ということにおいて、教科書だけでは不十分といっている。また「日本人の英語を見ると、日本語から直訳した表現が多い。しかし、英語と日本語の表現の仕方は結構違うので、正しい英語にならない場合が多いし、正しくてもおかしい英語になってしまう。正しい英語の表現を覚えるためには、テレビ番組や雑誌を利用するのが一番だと思う。無理に翻訳するのではなく、「英語でこう言うんだ」と思えばいい。」（日本人が英語を正しく使えない理由）と言っている。またよく日本人がかなり上手に話せる英語ネイティブに向かって質問をする「日本語を話すときに、頭の中では英語と日本語どちらで考えているのですか？」と聞いてしまうが、物事を考えているときにまず日本語から考えて、英語に訳すという作業を彼らは行っていないはずである。また日本語ネイティブで英語が大変得意な人も同様、日本語でまず考えてから英語に訳すという作業はしていない、しかしデスクワーク中心の教育は英語を使う際、日本語で考えてしまう、という傾向を生む。また教科書で文法を学ぶ過程においては、どうしても単語単位からきっちり訳し、英語を完璧に日本語に訳す、また日本語を完璧に英語に訳す、ということになってしまいがちである、そこにはどうしても英語にない表現、日本語にない表現を無理やり訳そうしてしまうことが原因で、わけのわからない言葉の羅列になってしまうという問題が起こる。私たちの現代の英語教育に重きを置かれている教科書学習だけでは「英語でコミュニケーションをとること」は不可能といっても過言ではない。

2. 英語教育の必要性

Asano は論文の中でこうも言っている。「子供が言語を簡単に覚えて、大人はなかなか覚えられないのはなぜだろう。私の考えでは、子供は深く考えないでどんどん真似をするからだと思う…「上達の秘けつは何？」と聞かれたら、上記のこと以外にまねが大事だと答える。私はテレビドラマで聞いた台詞を自分で使ってみたり、雑誌で読んだ単語や漢字を覚えたりして、だんだん上達していった。」とある。

また読み書きよりも、サウンドとして英語を認識すべきである。日本の英語教育は英語を文字列として視覚的に捉えることから始めることが多い。たとえば、中学校の英語の授業で真っ先に習うのは、アルファベットのつづりと個々の文字の発音で、英語はサウンドとして、聴覚的に捉えることから始めるべきである。何故かといえば、読み書きより聞く・話す方がはるかにやさしいからである。なぜなら、まず、幼い子供は、両親など周囲の人々が話しかけるのを聞いて、それを真似ることによって少しずつしゃべれるようになる。しかし、読むことや、書くことを行うようになるのはずっと後である。個人差はあったとしても、5歳くらいになれば、他人の言う事を理解できるようになるし、自分の意思を発言できるようになる。しかし、文章を読んだり書いたり出来るようになるのはずっと後である。また、世界には文盲の人は何億人というが、彼らは読み書きが出来ないだけで、聞いたり話したりすることには全く不自由していない。また、英語をサウンドとして捉えるというのは、それほどびぬけたアイデアではない。たとえば、ピアノのレッスンを受ける人が、「まず楽譜の読み方から始めなくては」などと考えるだろうか？普通は実際にピアノの鍵盤を弾いて、「このキーを弾くとこういう音がする」といったことから始めるであろう。世界的に有名なピアニストの中には、（眼が不自由ではないのに）全く楽譜が読めない人がけっこういるし、つまりは楽譜が読めることはピアノを弾けるようになるための必要条件でも十分条件でもないわけだ。逆に、譜面をいくら読んでも、実際にピアノの鍵盤を弾く練習を繰り返さない限りピアノが弾けるようにならないのは自明の理だろう。私たちは話すようになりたければ、文法どころよりも生きた英語に触れる必要がある。（浜口、日本の

英語教育は何故だめか？)

3. トータルフィジカルレスポンスの役割

トータルフィジカルレスポンスとは幼児の第一言語習得方法をモデルにしたものである。幼児は周りで話される言語を聞いて身体で反応し、言語を習得していく。言葉が理解出来てから、話すまでに結構な時間を必要とするが、それを「沈黙の期間」(silent period)と呼び、これを経てから幼児は自発的に話し始めるようになる。言葉と動作による意味づけがあり、話すことを強要されないで、話すことに伴う緊張がないのもこれをモデルとしているのである。聞いた言葉を全身で反応する、聴解力がつくことによって発表力がついてくるというものである。”(田崎, 1995, p.153) 実際の指導方法としてはトータルフィジカルレスポンスでは初め、教師による命令を聞き、学習者がその指示どおりに動作のモデルを見て行う。2, 3人、もしくはクラス全体で命令を聞いて動作をする、明確かつ簡潔で曖昧なものではないものを数回行う、初めは、簡単な動作からスタートし、そして難しい動作に持っていく。また今まで聴いた事のない新しい命令を聴いても理解出来るようになる。これを各授業の初めに前の時間の復讐をしていき、およそ10～12時間たった所で今までの行った命令を網羅したプリントを配り、読みの練習をする、学習時間が15時間を超えたら「役割交代」(role reversal)をして生徒が他の生徒に命令を発するようにする。これは英語を聞いて英語で理解する思考回路を形成するための教授法である。これらの方法はまだ言語を学習しだして時間が浅い学習者に有効な方法である。なによりデスクワークという一人ぼっちで黙々と机に向かい、開いているだけで眠くなる参考書をひたすら解き続けるのではなく、皆と一緒に楽しみを持って取り組める活動的な方法なので多言語を勉強するのは難しいという概念をなくすことができるであろう。また頭を使い、体を使って覚えたことは長期記憶に残りやすく、発話を遅らせるとリスニング力が伸長する、ストレスもなく楽しく学習することができるのが利点である。

4. トータルフィジカルレスポンスの利点

A. 学習者の負担を減らす

Logie のワーキングメモリモデル・システムというのがある。これは何らかの事態に直面した際、短時間で生じる入力情報の処理に関連する記憶システムのモデルのことである。その一つに音韻ループというものがあるが、音韻ループというものは、言語情報の特定プロセスに関係する2つから構成されていると考えられている。一つは音韻貯蔵部、これは2,3秒で減衰する音響や音韻などのような記憶痕跡を保持する。我々はいろいろな情報を音声、言語で表現しているが、それを脳内で繰り返すことにより、一時的に音韻情報を保持、再生することができると考えられている。

もう一つは、調音リハーサル部といい、音韻貯蔵部に保持されている内容をリハーサルし、再調音して記憶痕跡をリフレッシュすることである。学習者である子どもは目や耳から取り入れた情報を音韻貯蔵庫に保持しているが、日本における英語教育ではそれらをリハーサルできる量は不十分であるので、教師がその機会を意図的に増やしてあげる必要がある。しかしそれは人工的に作られたもので子どもが自然に構築していく知識ではないため、義務感を伴い、子どもの負担や苦痛になる可能性もある。これらは比較的高学年になり、学習レベルが上がる時期に起こるので、たくさんの教科書を使い、教材を使用することによって、子どもの多くの子どものモチベーションが低下すると考えられているこの時期にこそトータルフィジカルレスポンスが子どものモチベーションを上げることが可能ではないかと思われる。に適した教授法であると言える。

次に改善の余地がある、もしくはあまり良くないと感じた点について述べてゆく。最初に、授業を行う際にオーディオ・リンガル・メソッドの原則である、授業が全て英語で行われるという点で大変苦労した。まずこの時点で、当教授法を授業内で上手く活用できるか否かは教師の力量次第であると確信した。とりわけ現在の中学校教員の場合は授業の大半を日本語で行っているため、当教授法をいざ活用するとすると、今まで経験したことのない英語のみを使用した授業にすると、非常に困惑する教員が多く出てくるのではないだろうか。新任教員が当教授法を取り入れる際には、先輩教師の授業を参考にしながら、そして彼らのアドバイスや体験談を大いに参考にすべきである。また学習者たちも母語を使用しない授業に困惑することがあるかもしれないので彼らの不安を取り除くことも必要である。

一方、あまりにも会話文の模範と復唱の繰り返しばかりが続くので、ある程度英語の授業に慣れた習熟度の高い学習者にとっては新鮮さに欠ける授業と感じてしまい、また非常にくだいと捉える危険性が非常に高いと思われる。もしこれが毎時間続くとすれば、授業のパターンが毎回同じでマンネリ化してしまい、あまりにも退屈に感じてしまう学習者が出てくるのではなかろうか。生徒にこのような気持ちを抱かせないようにするためにも、教員の授業内容の改善に対する努力が期待される。

最後に、やはり文法項目について確かな説明がなされないために、従来の文法訳読方式の授業に慣れた生徒ならば自分が本当に授業内容の項目を習得できたのかについて大きな不安に駆られることがあるかもしれない。オーディオ・リンガル・メソッ

ドを活用した授業においては、教科書を開くこともなければ、板書を書き写すという作業もないので英語についてあまり知識が得られないかも知れない。初学者の学習者には英語のパターンを修得するために適した指導法であるかもしれないが、英語学習を始めてある程度経った中級以上の学習者に当教授法を用いて授業を行う場合は注意が必要であると言える。

5. ジャズチャンツの役割

ジャズ・チャンツ (jazz chants) とは、ジャズと音声英語を組み合わせる聞き話す能力を伸ばすことをねらった指導法で、歌を英語の授業に取り入れることの利点をそのまま保持しながら、英語の音調 (intonation)・強勢・リズム (rhythm) に焦点を絞って英語の指導ができるように考案されたのが、ジャズチャンツである。ジャズのリズムに合わせて、英語のイントネーションや強勢、リズムを自然に学習させようとするもの文型や発音の反復も模倣練習を楽しく効果的に行うように意図されている。“ジャズ音楽では適度のテンポ (tempo) とビート (beat) の組み合わせで種々の感情を力強く表現するように、言語ではリズム・強勢・音調・声の高さ (pitch) が話者の感情や意図を表現するのに重要な働きをする。ジャズ・チャンツは音声言語とジャズを組み合わせることにより、(1) 言語の「聴く・話す」技能を効果的に習得させること、(2) ある特定の場面・状況で使われる特定の構文の運用力を強化すること、を意図して考案された指導法である。” (田崎, 1995, p.215) とある。これこそが私たちが学習しないといけない生きた英語の学習方法であろう。

A. ジャズチャンツの利点

音楽というのは私たちの生活の中に密着している。音楽にはリズム、調子、音色など様々な要素がある。この度、フィンランドにあるユヴァスキュラ大学の Vaino Alluri 博士率いる研究チームによって、音楽の構成要素がどのように展開するのかを解析する新たな方法が開発されたことで、脳のそれぞれの要素に対する反応を解析することができるようになった…解析によって、音楽を聞くときは脳の聴覚野のみでなく、より広い範囲の神経細胞ネットワークを利用していることがわかった。例えば、音楽のビートには運動野が関わり、リズムや調子には感情に関わる大脳辺縁系が関わり、音色には注意力や創造力に関わる部分が利用されているようだ。(Large-scale brain networks emerge from dynamic processing of musical timbre, key and rhythm.) 音楽というのはこのことから脳全体で聞いていることがわかる。たとえば何十年たったとしても一回覚えた曲というのを忘れないのは記憶した音楽が脳全体の中のどこかに残っているのだ。そして音楽というのは関連した記憶を助ける効果がある。たとえば中学生の時に聴いていた音楽を久しぶりに聞くと、当時の悩んでいたことや、嬉しかったこと、その時の心情をとってもリアルに思い出したり、情景が浮かんだりする。通常では覚えることが困難であろう、長いセリフも音楽と一緒に聴くことによって覚えてしまえることがある。そういう意味でジャズチャンツでは決まった言い方や、ルールを覚えるためにはとても適していると思われる。英語にある独特のリズムや、強勢なども覚えられ。根拠として子供が未知の発話を聞くだけで言語を習得するのは「音の周波数変化に着目して語という下位単位を拾い出せるからだ」と分析している。特に歌においては「息継ぎをしないと話すことはできない。それは歌のとき、より明瞭な形で行われる。歌のほうかふつうの会話より、音の周波数変化が容易に聞いて取れるのはいうまでもない。」「子どもにとって、連続して流れる音を分節処理する材料としては、歌の方が、ただの会話文よりはるかに適している、ということになる。歌詞を音読したものを聴くより、歌で聞いた方が、分節化が容易である。子ども向けのプレイソングというのはおおよそ同じパターン構成されていることを、決して偶然とかたづけることはできない。」(正高, 2001, p.34) と述べている。また、ジャズチャンツはデスクワークとは違い、楽しんで英語に触れることができるため、学習者の英語嫌いや、負担を大幅に減らすことが可能である。母語の場合では、ネイティブに囲まれて育つので子どもが自然とルールに気づくことは容易だが、第二言語を習得する授業の場合で、限られた英語の授業内という短い時間でそのルールに気づくことが可能なのであろうか、心理学者の喜多宗太郎(1997)は「分析的・象徴的側面は、心の働きのうちに脱文脈化されれば、抽象度のない概念操作を扱う、言語的思考に代表されるような作用である。だがわれわれは『分析的に考えなくとも』わかってしまうような心の動きがある。『からだ的思考』と表現されるような方法による環境情報のイメージ的な把握の仕方—そういうものはことばより、むしろ発話に同期して生ずる体の働きによって表出される。」と述べている。「からだ的思考」というものは、体を動かすことを意味するのではなく、理屈抜きにわかってしまう感覚を育てる、ということの意味している。簡単な分を歌に合わせて歌う、となると高学年の子どもたちは恥ずかしがるかもしれないが、知らない語彙が多く含まれるジャズチャンツによるリズム練習を入れることで、興味を持たせることが可能である。また同じものを繰り返し接することで、母語の習得に近いプロセスで第二言語を学べる。またジャズチャンツでは教科書などには表記されない、単数形や複数形が意識されたフレーズ、“What’s up?” “How’s it going?” など生きた英語を学ぶことが可能である。

6. トータルフィジカルレスポンス・ジャズチャンツは役に立つ指導法か？

学習者にとって与えられた教科書を読み解き、ひたすらデスクワークをし、いざこれがどこで使われているかもわからないまま英語を日本語に訳し、文法を確認するだけのデスクワークでは学習者は苦痛を感じてしまう。幼児の第一言語習得のプロセスをまねたトータルフィジカルレスポンスや、音楽に合わせ長期記憶保持を可能とした、生きた英語を学べるジャズチャンツは、英語を学ぶ際重点的に使う主教材としては不十分かもしれないが、副教材として使用する分には大いに役に立つ指導法だといえる。

参考文献

- Asano, K. David. 「日本人が英語を正しく使えない理由」 Retrieved July 19, 2013 from <http://www-comm.cs.shinshu-u.ac.jp/david/papers/stories/japanese/english.pdf>
- 室橋, 春光. (2009,10) 「読みとワーキングメモリー: 「学習障害」 研究と認知科学」 Retrieved July 19, 2013 from http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/42649/1/murohashi_JJLD18.pdf
- 田崎清忠 (Ed.). (1995). 『現代英語教授法総覧』. 東京: 大修館.
- 浜口 登. 「日本の英語教育は何故だめか？」 Retrieved July 19, 2013 from <http://www.f.waseda.jp/hamaguch/NihonnoEigokyouikuhaNazedameka.htm>
- Vinoo Alluri, Petri Toiviainen, Iiro P. Jääskeläinen, Enrico Glerean, Mikko Sams, Elvira Brattico. Large-scale brain networks emerge from dynamic processing of musical timbre, key and rhythm. *NeuroImage*, 2011; DOI: 10.1016/j.neuroimage.2011.11.019
- 正高信男 (2001) 「子どもはことばをからだで覚える」 中央公論新社 (東京), p.34
- 「Motivation に焦点を当てた中等部英語教育のケーススタディ」 Retrieved July 19, 2013 from http://ci.nii.ac.jp/els/110006200419.pdf?id=ART0008218674&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1374142165&cp=
- Listening to Music Lights Up the Whole Brain Retrieved July 19, 2013 from <http://www.sciencedaily.com/releases/2011/12/111205081731.htm>
- 「ワーキングメモリの概要」 Retrieved July 19, 2013 from <http://blogos.com/article/19659/>

■英語科教育法Ⅱ 春学期レポート課題

授業で行うアクティビティ・基本的指導技術について

田井 寛子

1. はじめに

新学習指導要領が小学校では平成 23 年度から、中学校では平成 24 年度から、高等学校では平成 25 年度から全面实施される。新学習指導要領で現代の子どもたちが「生きる力」を育むことを理念とし、知識や技術だけでなく、思考力・判断力・表現力の育成を重視している。英語の授業でもこの「生きる力」を意識した学習が求められるようになった。つまり、単に教科書の内容を先へ先へと進めるのではなく、学んだ英語を実際にどのように使うかという「生きた英語教育」が必要とされているのだと思われる。そのため、英語の授業には生徒を主体としたアクティビティが必要となる。また数学や国語などの他の科目にはない人と人とのコミュニケーションを大切にできる英語の授業はその持ち味を活かし、人間形成の機会を与えるという意味でも大きな意味をなすのではないだろうか。これらの点を踏まえて、英語科授業で行われるアクティビティと基本的指導技術について考えていきたい。

2. アクティビティを通した「表現力」

アクティビティを通して培うことができる能力の1つと考えられる豊かな表現力とはどのようなものであろうか。船津、芝 & 福元 (2005) は、コミュニケーション能力の中でも、日本人の英語学習にとって特に重要であると思われるのが「自己表現力」に関わる部分であると述べている。たしかに、多くの日本人は母語である日本語でも自分のことを相手に伝えることに戸惑ったり、抵抗を感じてしまったりするものである。そして船津、芝 & 福元 (2005) は実生活でコミュニケーションが成立する原因を考察し、(1) コミュニケーションしようとする者に、語彙や文法等の知識、能力があること、(2) メッセージを発する側と受け取る側の双方が存在すること、

(3) メッセージを発する側・受け取る側の双方に欲求や必要性を感じているという3つの要因を述べている。そのためには教師が生徒にそう思わせたり、行動させたりするような内容を用意し、状況を作り出さなければならない。例えば、教科書のテーマに対し、生徒に賛成か反対のどちらか、またそう考える理由を述べさせるというアクティビティが挙げられる。(三浦 & 深澤、2012、p.138) Yes/Noで答えられる質問に、さらにWhy do you think so?で返し、Becauseに続けて自分の意見を述べるというこのアクティビティは、前述の「自己表現力」に大いに関係するものではないだろうか。もちろん既習表現だけでは生徒が本当に伝えたいこと・言いたいことは表現できない恐れもあるが、教師が、生徒が習った範囲内でいかに表現するかという生徒の能力を見ることができるとは思われる。また、発信するだけでなく、自分と異なった意見や考え、価値観を共有することは相互理解にも繋がると考えられる。留意したい点としてできるだけ実際の言語使用に近づけることが挙げられる。(三浦 & 深澤、2012、p.140) 日常でコミュニケーションをとる際に、文法事項から発想しないように、教師が既習の文法事項にこだわりすぎないことが求められる。(三浦 & 深澤、2012、p.141) 生徒の中には言葉でうまく伝えることができない者もいるかもしれないが、日常のコミュニケーションにおいて、アイコンタクトやジェスチャーなどのノンバーバル・コミュニケーションは母語である日本語でコミュニケーションをとる時には意識しないものである。このようにアクティビティを通して、英語を読む・書く・聞く・話すだけでなく、英語学習を超えた生徒1人1人の能力を引き出すことで表現力が養われるのではないだろうか。

3. アクティビティの利点および留意点

授業で行うアクティビティは教科書などの既習事項を実際に用いることで行う。つまり生徒が既習事項を本当に理解していなければならないことや生徒自身の表現力や思考力の育成を見ることができる。達川(2012)は、学力としての「言語力」は、外国語学習・教育で話題となる「語学力」とは異なるものと述べている。また達川(2012)は、その「言語力」とは情報を集めて、整理し、的確な言葉(表現)にする能力であるとし、現代社会はこのように論理的「思考力」と豊かな「表現力」を備えた人材を求めているとも述べている。この点から考えると、漠然と「英語ができる」というのではなく、いかに考え、いかに相手に伝えるかということが重要なことであり、中学校・高校ではそのような点に配慮した英語の授業・アクティビティをするべきであると考えられる。良いアクティビティとは生徒が無意識のうちに自然に習った文法規則を用いながら多くの英語を話したり、聞いたり、書いたり、読んだりできるものである。(三浦 & 深澤、2012、p.134) また他教科は個別で学ぶものであり、いわゆる「座学」が多い中で、英語はクラスメートや教師など他者と関わりながら共に学ぶことができるのは非常に魅力的な点である。そしてこれは単に英語という言語を教えるという学習ではないように思われる。例えばクラス内で、ペアでアクティビティをするとしても、いつも一緒にいる友人ではなく、日頃話さないクラスメートと話す機会を作ることもでき、同性だけでなく、異性の生徒とも関わることができ、授業が円滑に進むことで、より良い学級を作ることもできるのではないだろうか。茅野(2002)によると、日本人の文化的特徴として、自分が所属するグループの調和を重んじる傾向があるため、ペア・グループ活動を導入することで役割を果たそうとする意識、パートナーに対する責任感などが喚起される共に協同学習を通して学習することの面白さを知り、モチベーションが向上することが期待されるという。しかし、教師はそれぞれのペア・グループで各自が活躍できているかを観察する必要があると思われる。例えばペアでのアクティビティにおいて、相手との相性や学力などに差があると意味を成さない。また茅野(2002)はこのことに対するメリットとして能力の高いメンバーは他のメンバーを指導・援助することで既習事項の強化、新しいアプローチが発見できるという点があり、反対にデメリットとして能力の高いメンバーによるタスクのレベルの低さに対する不満や他のメンバーが依存することにより負担が増えることなどを挙げている。一方、茅野(2002)はequal-ability(同じ能力)を持つ者、cross-ability(異なった能力)を持つ者同士でグループ・ペアを作り、それぞれのレベルに合わせたアクティビティを行うことができるとも述べている。このようにアクティビティを行う上では、生徒の習熟度や性格なども考慮し、定期的に組み替えを行うのが望ましいのではないだろうか。

4. 基本的指導技術—4 技能の統合

このようなアクティビティを用いながら、教師は授業を行っていくが、毎回の授業の中で限られた時間を有効活用して教師は生徒に英語を教えなければならない。このことから英語の授業にはListening, Reading, Speaking, Writingの4技能がバランスよく組み込まれるべきであると思われる。巽(2012)によると、技能統合の授業で複数の技能を並べてつなげれば学習者にとって有益であるとはいえず、各技能を「有機的に関連付け」させて実際のコミュニケーションに近い言語活動が教室内に作り出されることが求められていると述べている。また巽(2012)によると、今回の学習指導要領改訂では小学校での外国語活動として英語活動の実施を踏まえ、「聞くこと」「話すこと」の目標から「慣れ親しむ」という事項が除かれ、中学校では「慣れ親しむ」段階を超えた言語活動が求められており、高校では「即興で話す」言語活動が「英語表現I」の内容に示されているとも述べている。つまり、現代の中高生は以前よりもより一層英語力が求められているのである。近年のグローバル化に伴い、英語教育が熱心に行われる

ことは良いことではあるが、これは生徒にとって大きな負担となり、教師が積極的に授業に臨める環境を整えることに留意しなければならないと思われる。

5. 基本的指導技術—辞書活用による「思考力」と「判断力」

日本では2006年7月～2007年1月に、韓国では2006年9月に行われたベネッセコーポレーション『東アジア高校英語教育 GTEC 調査 2006』によると、日韓高校生の日常での英語使用経験で「英語で書かれた説明書を読む」、「教科書以外の英語の本を、自分から進んで読む」、「テレビ・ラジオでの英語音声ニュースを聞く」、「英語で道を尋ねられて答える」などの各種項目のすべてが韓国より下回った。(安井、2009) また安井(2009)によると、同調査で日本の高校生の1日の英語平均学習時間(宿題・予習・復習として)、平日で「30分程度」が32.0%、「ほとんどしない」が40.8%であり、休日で「30分程度」が21.4%、「ほとんどしない」が30.2%であった。これでは英語学習はもちろん辞書活用もされていないことが考えられる。現場では紙媒体の辞書か電子辞書のどちらを使うかが問題とされているが、安井(2009)は電子辞書について生徒側、教員側の双方に理解不足があり、辞書指導を妨げていると述べている。紙媒体の辞書の最大の魅力はページが見開きになることからの一覧性とマーカーでの書き込みや付箋を貼りつけることで自分好みの辞書にカスタマイズできる点であると思われる。一方の電子辞書は圧倒的多数の生徒・学生が持ち運んでいるように携帯性と紙媒体の辞書では聞けなかった正しいイントネーションと強勢で発音される音声機能がある点であると思われる。どちらも長所と短所を持ち合わせており、個人によって使い勝手も異なると思われるが、どちらを使用するにしても、最も大切なことは複数ある意味の中からどれが適切な意味かを見極めることではないだろうか。安井(2009)によると、ある高校で生徒たちに行ったアンケートでは「教科書の後ろで調べた」生徒や市販の「教科書ガイド」という学校の教科書の解説書を見て丸暗記をする生徒が多い。文章中でその単語がどのような意味を成しているのか、役割は何かを全く考えることなく、与えられたものをそのまま覚えているのでは効果的な英語学習とは言えないであろう。また生徒たちの中でその単語の意味が限定されてしまい、別の文章中で同じ単語が登場しても意味が分からない恐れがあるのではないだろうか。授業をするにあたり、生徒に対して辞書活用を勧める際には、その使い方を伝え、生徒が新出単語を正しく自分のものにしてきているかを確認する必要があると言えよう。

6. まとめ

英語は本来楽しみながら学ぶべきものであると思われる。教師は学習者に英語を理解させるのはもちろんのことだが、興味・関心を持たせながら英語の世界へ導いていくことが理想である。しかし少しでも生徒に「学びたい」という意欲を持たせるのは教師の力量次第である。教科書通りに授業を進めていくだけでは、生徒はどうしても受動的に学んでしまい、「学ばされている」という感覚に陥りやすいと思われる。用意されたものを黙々とこなすのは単なる作業であり、生きた英語を学ぶことには繋がらない。自分で問題点を見つけ、調べ、それを知らない人に伝えるということは母語である日本語でも簡単にできることではないと思われる。それを英語で行うことで、新学習指導要領が目指す思考力・判断力・表現力が育成され、現場では生きた英語教育が行われるのではないだろうか。

引用文献

- 達川奎三(2012)「英語教育における思考力の伸長と表現力の育成のあり方：中学校・高等学校の英語授業の改善と充実に向けて」広島大学外国語教育研究センター
- 巽徹(2012)「4技能を統合的に活用する英語指導のあり方：中学校英語授業における技能統合活動の実践」岐阜大学教育学部
- 茅野夕樹(2002)「英語講座におけるペア/グループアクティビティ(活動)の導入：その効果と課題」『帯広大谷短期大学紀要 第39号』
- 船津真理、芝大也、福元元章(2005)「豊かな表現力の育成をめざして：表現力を高める評価活動の工夫(英語科)」和歌山大学
- 三浦省五、深澤清治(2012)『新しい学びを拓く英語科授業の理論と実践』ミネルヴァ書房
- 安井健一郎(2009)「大学生の英和辞典利用：初級レベルの英語学習者について」『尚美学園大学総合政策研究紀要』

Humanistic Approach（人間中心の英語教育）は役に立つ指導法か？

—その指導法の考え方と指導の実際から—

山本 妙

I. はじめに

現在の日本英語教育はグローバル化に伴ったコミュニケーション力の育成を重視しているのに対し、過去は学問的な伝統英語教育であった。行動主義的アプローチであり、文法・訳読式教授法を中心にし、形式的な教育が強く、知性主義に特化してきたのである。しかし、これらの教育方法は必ずしも日本の学習者達に利益ばかりを促すものではなかった。財団法人日本青年研究所(2007)は日本、アメリカ、中国、そして韓国の4か国の高校生を対象に「生活意識と人生目標」など調査した結果を『高校生の意欲に関する調査報告書』で2007年4月に発表した。調査方法は集団質問紙法であり、日本の1,461人、アメリカの1,271人、中国の1,763人そして韓国の1,181人の高校生に行われ、以下が一部質疑の集計結果である。

この調査結果が示していることは他国と比べ、日本の高校生は努力への諦念感、疲労感と周囲への焦燥感が強いことがわかる。また、近年、わが国ではいじめや自殺が増加し、メディアに大々的に取り上げられるほど社会問題になっている。他にも、登校拒否や非行などもまだまだ議論の余地がある。このような課題を解決していくためにも、豊かな人間性を育成し、自己実現を支援する「人間理解」の教育が必要であり、最も効果のある教育方法がHumanistic Approach(人間中心の英語教育)だと推測する。

表1 問16f 一生懸命頑張っても必ず報われるとは言えない

	日本	米国	中国	韓国
とてもそう思う	26.5	12.4	16.7	19.1
まあそう思う	39.5	24.1	32.2	51.5
あまりそう思わない	23.1	24.7	38.9	21.6
全くそう思わない	10.8	37.3	11.7	7.6
無回答	0.1	1.5	0.6	0.3

表2 問23b 何となく疲れていると思う

	日本	米国	中国	韓国
とてもそう思う	50.0	38.2	31.8	37.0
まあそう思う	39.0	48.4	55.3	48.5
あまりそう思わない	8.4	11.0	9.0	11.0
全くそう思わない	2.5	2.2	3.2	3.5
無回答	0.1	0.2	0.6	0.0

表3 問23m まわりから取り残されたような気になる

	日本	米国	中国	韓国
とてもそう思う	17.4	9.0	14.4	8.0
まあそう思う	37.0	27.4	35.6	28.5
あまりそう思わない	29.2	33.5	29.7	35.6
全くそう思わない	15.8	29.5	19.3	27.7
無回答	0.5	0.6	0.9	0.2

『高校生の意欲に関する調査報告書』。

財団法人日本青年研究所・2007より（単位：％）

II. 概要

1. 歴史

Humanistic Approach(以下HA)は、1970年代の初めにHumanistic Education(人間中心の教育)として、人間心理学、理想主義、実存主義、人間性開発に関する関心、そしてカウンセリングや心理療法に基づいて提唱された教育改革運動に基づいている。知育偏重主義だった時代があったため、次期に人間性を必要とした教育が提唱され、実際外国語教育界に登場したのは人間中心の教育の提唱から少し遅れた1973年ごろである。

2. 基本理念

基本理念の特徴としては、教育とは知識の獲得ではなく、自己理解であるという点である。また認知面、情意面、そして相互作用面の発達を狙いに行っている。認知面である技能取得、情意面である自己内省・自己表出・自尊感情、そして相互作用面である対人関係の形成を統合しようとするものがHAである。R.Valette(1997)は次のように定義している。「人間中心の教育は、全人発達に関わる教育である。...この教育は我々の成長を促進し、我々の行動を変容することにかかわる。」これは人間中心の教育は社会生活を営む力の育成に関わることを意味している。

3. 教授原則・指導法

B. Glayean(1977)がHAによる指導法の4構成要素があり、1つは自己覚醒(Self-awareness)である。これは自分に対する気づき、つまりself-identityの探究のことである。次に自己表現(Student output as class content for language practice)があげられる。これは知識など認知的なものが、感情など情意的なもの深く関わり合うことで学習者自身の個性を明らかにしていくことである。3つ目として「今ここで」を重視する指導(Here and now teaching)がある。これはその瞬間に心の中にできた感情をありのままに、且つリアルに生かすことである。そして他者との共有(Interpersonal sharing)が最後のHAの指導法の要素にあたる。伝達することでコミュニケーション力が向上し、傾聴することで、他者の気持ちを理解し、幅広い視野から物事を判断することができる。しかし、個人的内容を共有することは、積極的にを行うことができる学習者もいれば、一方抵抗する学習者もいるので、ここは教員による学

習者達の心理状況の把握と彼らへの配慮が必要である。では、児童生徒の問題行動等、生徒指導上の諸問題が懸念される今、この人間中心の指導法は学習者と教員にどのような作用を、そして一体どのようにもたらすのかを論ずる。

III. Humanistic Approach の利点

1. 協同的学びによる自己理解

HA の 1 つのメリットとして、協同的学びによる自己理解があげられる。まず、なぜ HA がどのように自己理解に効果的であるかと考えると、この教育法の自らの記憶・経験・感情・願望など意思を共有するコミュニケーションの取り方で、関わり合うという指導原則に根拠を求めることができる。しかし、ここで陥りやすい間違っただけのコミュニケーションに焦点を当てた指導を行わないことが必要だ。コミュニケーション活動を取り入れる英語教育が日々重視されているが、実は意思を共有するという目的は決して発声だけではなりたい。コミュニカティブな授業を作成しやすい英会話表現でも、必ずしも自己表現を用いた英会話に繋がるとは言えないのである。例えば、教科用図書には会話が印字されているが、本文をペアで発声するだけでは全く自己の意思を表せず、他者と個人的情報の交換に至っていない。よって教材の内容・意図を学習者に読み取らせ、アウトプットさせて初めて意思の共有に繋がる。会話表現の習得を重視した教材を利用し、HA の指導法に沿ったアクティビティを考えてみよう。登場人物の名前を学習者自身に変え、いくつかフルセンテンスを空白にし、自ら考えさせるアクティビティはどうだろうか。教員が教科書と全く同じ文を作らないこと、名前は自分に書き換えること、また自分だったらどうするかと 3 つ条件を与えてアクティビティを行うと、学習者は自分に置き換えて考え始め、自分だったら、と自己理解に繋げることができるだろう。このように、コミュニケーションを活用した活動は、まず学習者自身について考えさせ、情報交換することで、協同的学びによる自己理解を獲得することができる。

2. 他者に対する豊かな心の育成

この教授法は、学習者が理解可能なインプットを受け取ったときに言語習得が達成されるという Krashen の仮説に基づいており、授業内容が理解できれば、理解の媒体の役割を果たしている言語をも学習したと言える。ここでの望ましいインプットとは、生徒の現在の言語能力の段階を i とすると、それよりも一段高い段階の内容を含んだもの、つまり $[i+1]$ という形式の内容を与えることであると田崎 (2007, pp.186-187) は述べている。教師は学習者である生徒がどの程度の知識を有しているのかを把握し、生徒の興味や関心を引き出せそうな内容を多く与えることができれば、彼らは内容理解を繰り返していくうちに言語習得も行うのだろう。

3. アウトプット能力の発達

上記に示したタスクのタイプに加え、開いたタスク (open task) と閉じたタスク (closed task) がある。到達点や答えが一つに定まっていなかったのが前者のタイプであり、ディベートやディスカッションがこの例にあたるだろう。ある程度の英語を運用できる力を付け始めた高校生に対してなら、導入することは可能かも知れないが、中学生では少し高度であるように思われる。一方で、後者のタイプは到達点が明らかにされているため、上手くタスク活動を行えたかどうかを学習者自身が確認でき、彼らは到達点に近づこうと熱心に取り組むようになるだろう。用いるタスクのタイプを授業内容に合わせればよいが、積極的にタスク活動に取り組もうとする効果の有する閉じたタスクの方が適していると言えるかもしれない。

3. リラックスした学習環境の形成

4 つ目のメリットとして、この指導法が良い学習環境を形成できることを論じたい。HA の指導モデルの 1 つとして「生き生きした教室」が述べられている。良い学習環境があることに超したことはないが、なぜ学習環境が英語教育の成功を決定づける鍵として重視しているのだろうか。その答えとして、学習環境が学習者の学びのイメージを作るからである。例えば、発言しやすい授業であれば、学習者は自ら発声することができるだろう。逆に言えば、悪い学習環境の中では、授業は学習者にとって非常につまらなく意味のない無駄な時間を過ごすだけになる。また、固く重苦しい雰囲気のある授業では、教室には学習者がたくさんいるため人前で発言する際に間違いをおかすことを恐れやすい。つまり、学びを促進するか、阻害するかは教室の環境次第であり、生徒が脅威を感じない安全な学習環境を教員が作りだせるかにかかっている。これらを配慮し、良い学習環境を作りだすことができた場合、自然な暖かみのある授業を行うことができる。また上武 (1971) は、「自然の状態または比較的安静の状態にあるときに、遺伝的規定度が著しく大になると論じている。つまり、自己表現は緊張した時よりもリラックスした状態に最も行いやすい。リラックスした自然な学習環境の獲得と同時に、より学習者は自己表現を行うことができるだろう。

IV. Humanistic Approach の課題

1. 教員の意欲と在り方

利点がある一方、HA はいくつかの課題も抱えている。まずこの指導法は教員の意欲が求められる。第一に温かみのある人間でなければならない。大きな声を出し、明るく振る舞い、笑顔で学習者と接することは必須だろう。また、学習者に挑戦を恐

れさせないように、学習者が間違っただとしてもポジティブなフィードバックを与えることも求められる。学習者は自ら答えを出すとき、間違いを指摘されることを恐れる。仮に、学習者の出した答えが間違っていたとしても、発音や、部分的な単語の意味、または声の大きさなどたくさん存在し、彼らを褒めるべき部分は答えそのものだけでない。そして、学習者に活動を積極的にに行わせるためには、教員自身の在り方を問われるだろう。学習者に関心を常に持つておくことである。学習者は教員が無関心だと感じると、学習意欲は低下し、諦念感が生まれるだろう。このように教員の振る舞い方は、学習者から見た教員のイメージになり、そのイメージは教員が担当する科目自体のイメージに直結してしまう。よって、学習者を一人の人間として育てるために存在し続け、学習者と教育に対し愛情と熱意が必要である。

2. リスクテイキング

この指導法では意思の交換が行われると同時に、学習者の心に触れるため、慎重さも求められる。時に学習者の感情に踏み込むためリスクがある。どのような科目であっても、教員は常に学習者を尊重しなければならない。子どもたちの心は傷つきやすくナイーブであり、そして恥ずかしがりでもある。また、彼らは否定されることに躊躇い、授業中の悲観的な出来事は心に残り続ける。よって他の指導法よりも心理に関係し、学習者の感情を活動に用いるのでリスクを可能性が高い。教科書の題材も決して明るいものだけではない。戦争など、道徳観も関わるものもあるだろう。逆にリスクを取ることを恐れれば、消極的な授業になってしまう。例えば家族をテーマにした題材があるとすれば、中には複雑な家庭環境の中で育ってきた学習者もいるだろう。質問に躊躇すれば、教員は彼らを傷つけることを恐れ、消極的になり、無言や沈黙の多い授業になってしまうこともあり得るだろう。これらの理由から教員は学習者の心情を配慮しながら授業を遂行しなければならない。

3. 反知的主義

先述のように、この指導法は知育偏重主義に反して確立されたものである。よって、自己・人間・人間関係の学習であるために、決して知識中心的な学習でない。しかしながら、学習指導要領がある限り、必ず教えなければならない文法・英語表現など、様々な分野が存在する。よって情意面での教育を施しながらも、これらを教育にも着手しなければならないが、クラスのサイズによって時間がかかり詰込み型の授業になってしまうことが懸念される。もし、残された授業時間と、学習内容に余裕がない場合、必ず説明型の方が手取り早く、HAを用いた指導法や活動は後回しになるか、もしくは無くなってしまうだろう。

4. クラス・マネジメント

教室を管理することは授業を始める以前に教員が徹底すべきことの1つである。しかし、教室の雰囲気良すぎると授業が成り立たなくなってしまうはいけない。Paul(2003)は教室運営として教員が学習者の過熱を防がなければならないと述べている。コミュニケーション力を向上する1つの手立てとしてゲームを行う場合は勝ち負けにこだわらせることでなく、学ぶことへの集中力を維持しなければならない。ゲームであっても学ばせなければならないが、間違えると、単なる遊ぶための時間になってしまう。また、佐藤(2010)は、教員は教室の中でジレンマと戦いながら教室を管理しなければならないと論じている。教員は常に二つ以上の対立する事柄がぶつかりあって処理できないジレンマに遭遇している。学習者と自分との関係、学習者達の相互の関係、学習者と教材との関係など、常時良いバランスを保持するために観察していなければならない。知能を集中的に教育する指導法より、アクティビティが含まれる可能性が高いHAでは、複雑な出来事がより発生しやすいだろう。

V. 実践を通して

実際HAに基づいた模擬授業を2013年11月11日に、Sunshine 2Program3-3を教材に本学で共に教職課程専攻の学生に行った。この題材は「I think～」を使い、自らの意思を表現する単元であったため、人間中心的な教育に非常に適していると感じた。また、作成したワークシートはできるだけ学習者に書くことに徹することができるように考えたところ、「土台を作ってくれると自らまとめる意欲に繋がる」と好評を得ることができた。教科書の題材の理解を把握するために作成した設問も、内容を問うだけでなく、オープンエンド・クエスチョンを用いて登場人物の心情を問わせ、答えが1つでない設問にした。また、対話が多く、コミュニケーション的な活動を盛り込んだため、学生から「楽しかった」と声が多数上がった。

しかし、いくつかデメリットに関した反省点も生まれた。1つは指導案どおりに授業を遂行できなかったことである。導入のwarm-upで幅を広げすぎた話題を取り上げ、常に学生の意見を1つ1つ拾うのに時間がかかってしまった。後の活動に影響が出てしまい、結局は「I think～」など自己表現をさせる最後の発展活動を実行することができなかった。これに対して、活動が偏らないように、メリハリをつけて授業を展開させていかなければならないと痛感した。次に、読む時間が全く足らなかったことである。どうしてもアクティビティに読解し、アウトプットさせる時間が必要であったため、教科書の全文を発声する機会が減ってしまった。この解決策としては、HAに偏りすぎた指導にならないために、アクティビティは時間をかけすぎず、必ず教科書を音読する活動は保持しなければならない。

模擬授業を通して、教材のテーマや、教科書の内容によって適性があるが、人間中心の教育方法はこの単元に最適だと感じた。また、何より、生徒達の豊かな心を育て、楽しみ、学ぶことができる。これこそが理想的な生徒の学習課程の1つであるのではないだろうか。しかし、心理学の理論から生まれた教育方法であり、教育論とうまくかみ合うのか、またどのように授業を展開かなど、HAについてはまだまだ研究と試行錯誤が必要だと考えられる。

VI. まとめ

二十一世紀に入り、学校は歴史的転換を遂げた。教えることを中心だった学校は効率性優先し、労働者を養成する場であった。今、ポスト産業主義社会の到来により、文部科学省が教育行政の権利を持ち、時代と共に学校の改革が進んでいる。そして、学校の改革は、学習者の未来の学習であり、直結しているのである。将来、学習者たちの「勉強」は何を意味し、彼らのどんな存在であるべきなのだろうか。私は「勉強」が彼らにとっての「学び」に転換することを期待したい。過去行われてきた「勉強」はややもすると個人主義的閉鎖的で競争的でもあった。他者の力を借りず、これまでは一人で達成することが美徳されてきた。一方「学び」は協同的である。必ず他者を巻き込み、共に考え、共に言葉を交わし、互いの学びを促進することができる。勝ち負けを重視するよりも、協力しあうことで、学習者の人間性を作りあげることができるのである。これは人間中心の教育方法だからこそ達成できるのではないだろうか。

教育は学習者達にとって、認知的にも、そして情意的にも非常に大きな影響を持っているのである。教員が行う授業は何度も経験するうちの1回だとしても、学習者にとってはその1時間は一生に1度の経験であり、それが学習者の知識となるからである。また、学生生活は長い人生の中では一部分であるが、人格の形成もここで大きく関わるのではないだろうか。さて、今後の展開として、グローバル教育との適合・調和方法や、現在懸念されている生徒指導上の教育問題など、目まぐるしく変化し続ける教育の在り方は、まだ議論が終わりそうにない課題である。

参考文献

- 上武 正二 (1971)『精神機能における遺伝と環境 双生児法による実践的研究』 p.228 誠文堂新光社
- 財団法人日本青年研究所 (2007)『高校生の意欲に関する調査報告書』 検索日 2014年2月1日 . <http://www1.odn.ne.jp/~aaa25710/research/2007/tanjyun2.pdf>
- 佐藤 学 (2010)『教育の方法』東京：左右社
- 縫部 義憲 (1985)『人間中心の英語教育』東京：ニューベリハウス出版社
- Galyean, B. (1977). *A Confluent Design for Language Teaching*. TESOL Quarterly 11, 2, p.148 Published by Teachers of English to Speakers of Other Languages, Inc.
- Paul, D. (2003). *Teaching English to Children in Asia*, Hong Kong: Pearson Longman
- Valette, R. (1977). *Humanistic Education*, the C.V. Mosby Company, p.1.
- 参考教科書
- 開隆堂出版 . *Sunshine 2 - Sunshine English Course 2-*. Program3-3.

■英語科教育法Ⅱ 秋学期レポート課題

高等学校での授業デザインに大切なこと

中村 沙貴

I. はじめに

様々な分野で加速するグローバル化の波は、教育の現場にも押し寄せている。英語力の向上は、今や一部のエリートだけに求められるものではなく、全国民に対し求められているようだ。実際に、我々が英語力を求められる場というのは、格段に増加しており、就職活動や入社後の昇進にも影響することがある。また、国際的な学力や企業の競争力にのみ焦点を当てているのではなく、国際共生や異文化理解の観点からも、英語力の向上が叫ばれているのではないだろうか。ところで、この英語力という言葉は、英語の言語能力のみを指し示すのではなく、英語を用いたコミュニケーション能力をも含んでいる。つまり、現在、日

本の教育現場で求められている英語授業は、英語の言語能力の向上と、英語でのコミュニケーション能力の育成を両方合わせ持った授業である。それでは、その英語力を高める授業というのは一体どういうものなのだろうか。また、それを展開するためには、教員は何をしなくてはならないのだろうか。本レポートは高等学校での授業をテーマに考える。

II. 高等学校での英語教育に求められるもの

まず、高等学校の英語教育には、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの4技能を習得、向上させることが求められている。文科省の検討会議でも、2011年から2016年までの5年計画で示した英語力向上の提言で、実用的英語能力試験の積極的活用を求め、高校3年生段階で一定の英語力をつけることを目指しており、高校卒業時点では英検準2級または2級程度だとしている。しかし、現実の高校生の実力は、文科省の調査（2012年12月現在）によれば、英検準2級以上を取得する高3生：10.6%（同等の力があると思われる生徒を加えると31.0%）と、求められる水準にはほど遠いのが現実であり、提言の具現化には、まだまだハードルが高そうだ（ベネッセコーポレーション、2013）。

さらに、4技能の統合的な指導を通して英語を用いたコミュニケーション能力の育成も求められている。ここで、英語を用いたコミュニケーションについて考える。英語を用いたコミュニケーション能力を育成するためにすべきことは三つある。一つ目は、上記の4技能、とくにリスニングとスピーキングの能力を伸ばすことだ。他者と英語でのコミュニケーションを図れないと感じる生徒の中には、コミュニケーションを図れるほどの能力が育成されていない場合があるからだ。これは、とくに英語学習の初心者であるほど、コミュニケーションを図れない要因となっている。

二つ目は、自分の意見を発言することに対する消極的な態度の改善である。これは生徒や学生に限ったことではなく、日本人全体に対して指摘されてきたことだと思われる。教員からの問いかけや、ディスカッションの時間を増やすなどして、生徒が意見を口にする機会を増やすべきだと考える。

三つ目は、物事に対する知識がないことが挙げられる。これに対しては、英語という言語や文化に対する背景知識を増やすこと、または英語に限らず物事について深く考え、様々な経験をすることが解決策となるが、個々人の努力に大きく依存するものだろう。しかし、トピックについて、しっかり調べなければできないような宿題を与えることを繰り返すことによって、この問題も少しずつ解決され得るのではないかと考える。

III. 授業デザインに際して考慮すべきこと

1. 生徒の現時点での英語力の検証

まず、個々の生徒の現段階での能力を測定することが重要だと考える。学内での試験や授業中の活動からの検証は、全指導者がすでに行っているだろう。それに加えて、英検やTOEIC、TOFEL試験のような学校外部の試験結果も役立てることが可能である。先にも述べたが、現実には、文部科学省も実用的英語能力試験の積極的活用を求めている。生徒の現状での英語力を知ることによって、生徒それぞれの得意や不得意、クラス全体の苦手の傾向などがつかめるのではないだろうか。それらを十分に分析し、認識した上で、授業を編成したり、補助教材を与えることが必要になってくる。

2. 動機づけ

学習というのは、やはり何らかの目的を持って行うべきであり、そうあることで学習の効果がより期待できる。試験などでの高得点をめざして勉強する外発的動機づけと、楽しいから、もっと知りたいからといった理由で勉強をする内発的動機づけがある。これらにおいて継続性が認められるのは後者の内発的動機づけである。意欲的に学習に取り組むというやる気には、この内発的動機づけが大きく関わっており、内発的動機づけに基づいた学習は、効果的で、継続性があると言える。また、教員にとっても、生徒が楽しみながら、勉強ができることは理想である。

では、内発的動機づけにつながる授業とはどのようなものだろうか。一つ目は、教員中心の授業ではなく、生徒中心の授業を展開することだ。例えば、これまでの日本の英語教育では、文法訳読教授法のような、教員が一方的に話し、日本語訳を行い、生徒がそれを聞き、ノートを取るといった光景が多く見られた。これでは生徒は退屈し、英語に対して面白みなど感じられるはずもない。生徒に意見を求め、実際に英語を使わせてみるような、他の教科の授業や、今までの英語授業とは違った新しさが必要だと考える。

二つ目は、生徒の英語に対する恐怖心を取り除き、自分自身の英語力に対し自信をつけさせるということだ。近年、若者の海外留学離れが取り沙汰されているが、これを若者の内向き思考とか、向上心のなさの表れだと報道するメディアが多い。しかし、文部科学省（2011）の調査によると、海外留学をしたくないと回答した生徒の理由として、最も多かったものは「言葉の壁」であった。つまり、自分は英語ができないという事実、もしくは思い込みによって、海外留学をしたくないという結論に思い至っている。

この自信のなさが彼らの英語学習への積極性を妨げる一因なのではないだろうか。これを改善するには、生徒に英語ができるという達成感を与えることが重要だと考える。生徒の能力に見合った難しすぎない問題を設定することや、ゲーム性を備えたアクティビティなどが良いと考える。

3. SWBAT の設定

授業ごとに SWBAT (Can-do statement) を定めるべきである。SWBAT とは、Students will be able to ～の頭文字であり、つまり、学習目標をできる限り具体的に示すことを目的に使われ、教員が一授業ごとに学習の目標を明確にできる。また、これは生徒の評価を行う際にも有用である。生徒がこの SWBAT にある項目を出来たかどうかで、生徒がその授業における目標を達成できたかということが容易に分かるのだ。さらに、授業やカリキュラムの評価にもつながる。SWBAT を達成できなかった生徒が多かった場合は、その授業やカリキュラムに何らかの問題があったということになるからだ。また、根岸 (n.d.) は、「教師・学習者の観点から考えると、Can-do リストを用いれば、指導や学習を振り返ることができる、そのためのものである。振り返った上で、Can-do という観点でこれから何をすべきかを考えるためのツールとして Can-do リストを位置づける」と述べている。つまり、生徒に対し、SWBAT を示すことで、生徒の自主学习にも役立つということだ。

4. 大学入試材

今までの英語授業がグローバル化に対応できていなかった理由の一つには、大学受験を念頭においた英語教育であったことが挙げられる。安河内 (2012) は、日本では 18 歳までの教育の主目的は、子供をいい大学に入れることであり、それまでの学校・塾・予備校の英語教育は、大学入試の内容から逆算して作られている。目標となるテストがそれまでの教育手法に与える影響、つまり、ウォッシュバック効果だと述べている。現在、大学入試が大きく変わると言われているが、その実どのように変わるかなどまだ確実ではない。さらに、もし変わったとして、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの 4 技能がバランスよく測れるような入試に変わるわけではないだろう。

おそらく、どのように大学入試が変わろうと変わらなかりと、高校の授業は大学入試に影響される。しかし、コミュニケーション能力などといった大学入試にはあまり関わりのない分野も、授業では取り扱わなければならない。そのためには、大学入試に特化した授業を行う時間などを設定し、それを生徒にしっかりと伝えておくことも必要なのではないかと思う。そうすることで、安心して大学入試には関係のない分野であっても精一杯取り組めるのではないかと考えるからだ。

IV. おわりに

急激な外国語科教育の変革やグローバル化の影響によって、日本の英語教育は大きく変わっている。ゆとりの時代は終焉を迎え、再び詰め込み教育の時代に戻るのかもしれない。しかし、英語教育の在り方によっては、将来の分岐点ともいえる高校生という大事な時期に、かえって英語アレルギーを抱く者を生み出してしまう可能性もある。それを避けるためにも、一人ひとりの学力をしっかりと分析し、授業目的を定め、大学入試への不安を取り除きながらも、楽しめる授業を行うことが英語力を伸ばすことにつながると考える。

参考・引用文献

- 根岸雅史 . (n.d.). 「CAN-DO リストは日本の英語教育に何をもたらすのか」 Retrieved from http://www.britishcouncil.jp/sites/britishcouncil.jp/files/ji_diao_jiang_yan_2_can-do_risutohari_ben_noying_yu_jiao_yu_nihe_womotarasuka.pdf
- ベネッセコーポレーション . (2013, 6, 10). 中・高校生と英語教員の英語力、実際の実力は？ . Retrieved from <http://benesse.jp/news/kyouiku/trend/20130610080055.html>
- 三浦省五 & 深澤清治 . (2009, 3, 12). 『新しい学びを拓く英語科授業の理論と実践』 京都：ミネルヴァ書房 .
- 文部科学省 . (2011). 「平成 23 年度高等学校等における国際交流等の状況について」 Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/fieldfile/2013/10/09/1323948_02_1.pdf
- 安河内哲也 . (2012, 12, 13). 「大学入試の英語が変わる！：英語教育改革の切り札「TEAP」がついに登場」 東洋経済新報社 . Retrieved from <http://toyokeizai.net/articles/-/12124>

ニーズに応じた補助教材の開発と活用

山本 妙

I. はじめに

社会や経済など、さまざまな分野のグローバル化が進み、日本英語教育にコミュニケーション力の向上が日々求められてきている。文部科学省は平成 23 年度より、小学校において新学習指導要領が全面実施され、小学校 5・6 学年で年間 35 単位時間の外国語活動が必修化された。続いて今年、2020 年には小学校 3 年生から英語教育を開始する方針を固め、外国語活動を、正式に教科に格上げすることを発表した。このように、わが国の英語教育の重要性は急速に高められている。同様に、教員にも高いレベルの教育力が求められている。聞く (Listening)、話す (Speaking)、読む (Reading)、書く (Writing) の 4 技能の英語運用能力はもちろん、教材を分析、開発する授業を準備する力が必要とされていっている。教材とは、安彦・新井他 (2002) は、教育活動において、一定の教育目的に従って選ばれた教育内容を学習者に教える際の材料となるものと記している。また教材開発とは、教員など学習者に教育を施す者が、事前に学習を促す可能性が込められた素材を研究、分析、そして解釈し教材を作ることでありと三浦・深澤他 (2009) がまとめている。それではなぜ教材開発が必要なのだろうか。

教材は学習目標・課題を学習者に深く浸透させることが最も必要な理由であり、同時に良い教材開発に求められる最大の目的でもある。では教材は実際の教育現場でいつ活用されるべきか。Reinders(2012) は言語を習得する過程で学習者は情報を Input、知識を Intake し、そして知恵として Output すると推測している。このプロセスの中で、一つでも抜けるとどうなるであろうか。まず Input が無くなると、情報が与えられないので学習者は理解する手立てを失ってしまう。次に Intake が無くなると、学習者は自分でどのように活用するか考える時間を失い、次の Output で成功することは難しい。最後の Output がなくなると活用せずに終わるので学習者に知識が身に付くことはないだろう。このようにこの 3 つのプロセスはどれも必要不可欠であり、学習者に授業の焦点を掴ませるためには段階的に行われていくべきである。そこで、この 3 段階に補助的な役割を担い、より学習者の理解促進を支援するものが教材である。教材には教科用図書 (以下教科書)、文具、体験的資料、確認用資料、演奏用具、器具やパソコンなどさまざまな種類があり、教科書は学習指導要領に示された教科・科目等に応じて作成されている。学校教育法第 34 条 1 項では、「小学校においては、文部科学大臣の検定を経た教科用図書又は文部科学省が著作の名義を有する教科用図書を使用しなければならない。」同条は中学校、高等学校にも準用される (同法第 49 条、第 62 条) と記されている。このため、教科書使用義務否定説もあるが、教科書が実際の日本の教育現場で使用されることが一般的であり、学習者は教科書から多くの知識を得ている。そこで主教材とされる教科書をベースにワークシートなどの補助教材を使い、いかに Input、Intake、そして Output させるかが学習成功への鍵となる。教材開発の技術・意図・活用方法が問われる中、この 3 段階時のニーズに応じたものが必要と考え、それぞれどのような教材が求められているのかをここで論ずる。また、本論では補助教材の開発に焦点をあてて議論を展開したい。

II. ニーズに応じた補助教材とは

1. Input 時の補助教材

Input とは言語習得において欠かせない言語習得の大切な過程の 1 つである。また理論仮説として、The Input Hypothesis (インプット仮説) がある。田崎 (1995) はこれを Input とは理解可能であること、興味深く自然であること、文法項目中心に配列されたものでないこと、そして多量であることと詳しく説明している。では Input は授業の中でいつ効率よく行われているだろうか。Paul(2003) は探究のサイクルを Notice (発見) から始まり、Want (欲求) に続くこと、そしてここで行われる動機付けは学習者が学習をやり甲斐のある挑戦とみなすかどうか大いにかかっていると述べている。後者に続く Intake と Output も存在も考慮し、Input は順序的にはもちろん、興味を引き出すことが重視されている点で、授業の導入部分にあたと推測する。導入部分として重要点は学習の動機付けであることだけでなく、復習であること、そして新たな学習の Input であることである。では、導入時にはどのような教材が Input の効果をより高めるだろう。

まず、先ほど述べた理論仮説のとおり、複雑なものでなく、多量であり、そして学習者の興味を作り出すものでなければならぬ。学習者の能力を刺激する導入に適した教材の 1 つとして音楽を利用することが適している。例えば、バックグラウンドミュージックとしての役割を考えてみよう。中学校英語教科書の Sunshine 3 Speaking up 2(pp.22-23) はレストランでの店員と客の英会話表現の内容が題材となっている。会話表現を活用すること、そしてコミュニケーション活動を幾度と行うことが教材観から判断できる学習目標であろう。この題材の導入時に使う音楽の選択としては重く暗い音楽より、明るい音楽を使うほうが良い。なぜならば英語を話しやすい雰囲気を作り出すことが求められているからである。一方、単元が戦争のテーマである NEW CROWN 1 Not So

Long Ago(pp.112-119)では、日常的な会話というより、自分の考えや戦争に対する意見を述べるディスカッションや、しっかりと読みこみ著者や本文内容に登場する人物の心情を掴む方が学習目標として単元のテーマに適しているだろう。ここでは前例とは対照的に、明るくはつらつとした音楽よりゆっくりとした音楽の方が、単元のテーマに適しているのではないだろうか。バックグラウンドに流れている音楽はクラスの雰囲気やその時行っている学習に対して大きな影響を与えるのである(Paul, D. 2003)。また音楽の利用法はこれだけでなく、歌うこと、振りをつける、チャンツ、早口言葉や聞き取りなどさまざまのものが、音楽の種類にも歌詞の有無、クラシックなどのジャンル、またはゆっくりとした曲から速い曲まで千差万別である。そこで学習内容によって必ず利用する曲を選別することで、学ぶための教材となるのである。

もちろん Input 時に適した教材は音楽だけでなく、写真や映像を見せること、またゲームを教材として用意することも考えられる。これらは活用法次第で十分学習者の意欲をかきたてることができる。何かを学びたい、活用したいという欲求は教員が作り出すものである。それはただ単に教師中心的に単元内容を授業序盤に説明するだけでは作ることができず、何も新しい刺激を与えられない学習者は学ぶ人間ではなくただ教えられる人間だけになってしまうのである。学習者達は一人一人好奇心に満ちており、主体的な学習者である。彼らのその学びたいという好奇心は導入時に教材を使って引き出すことができる。

2. Intake 時の補助教材

Intake の定義は様々あるが、Input と Output の中間的ステージであり、学習内容を発見しているが、活用するほど学習者の中で情報が知恵として統合されているものでない過程である。また、Intake は Input されたものを Output につなげる準備でもあり、第二言語の習得発達への戦略である(Reinders, H. 2012)。Krashen の The Input Hypothesis では理解可能な Input によって学習者が自然に言語を内在化するしかないと言われているが、日本のように英語に触れる機会が圧倒的に少ない国には、Intake によって言語を内在化するべきであると推測する。よって上述の理論からも、次の Output ためにも教員から情報を整理し、知識から知恵へと円滑な支援が必要である。では Intake は実際の授業ではいつ行われていると言えるだろうか。Paul(2003)は探究のサイクルで Want (欲求)に続き、Challenge (挑戦)であり、それは単語や表現パターンについて理解し始めた際に活用する前にその準備を始めていると述べている。よって実際の授業では導入の後であり、実際に活用する前の時間帯こそ Intake が行われている瞬間に相応しいであろう。では次にこの時に適した教材とはどんなものか論じたい。

先行の Input 時に情報が多量に与えられているため、学習者は興味深くある状態になっているだろう。そこで次のステップに進むべく、教員は学習者の情報を彼ら自身で活用できるように整理しなければならない。例えば、教科書の単語を発声・説明などで導入すれば、彼らはその単語についての情報を教員から受け取る。単語の情報だけではまだそれ自体しか理解できず、どのように活用すべきかなど具体的な活用方法を理解していない。料理に例えると材料、調味料そして道具など、必要な物を受け取って準備万端であっても、レシピが与えられず、何を作るのか、そしてどうやって作るのかが理解できていない状態である。ここで必要なのは活用方法と、その困惑状態から紐解き教える立場、つまり教員なのである。しかし、単語をどのように活用するか、本文の中でどのような意味を成すか説明するとしても、分かりやすく手立てを作成しないと次のステップに進むことができない。そこでその手立てとなる教材の1つとして、ワークシートやプリントがあげられる。これら役割は大事な言葉を書き込ませ、自分でまとめることで学習内容の核の部分とつかみ、自ら学習内容を咀嚼することができる。また、形式や内容を工夫することで、より学習内容を理解することができる。教員が拡大して黒板に貼ることで進行を確認し、学習内容を振り返ることもできる。また副読本、問題集も同様に文法項目や内容が整理されているため、学習者自身の情報も整理されやすい。また資料集は知識に幅広げることができる。

これらを活用する時には当然注意点がある。教師中心的に説明を進めすぎると生徒自らが情報を整理する力を失う。またワークシートやプリントなど、教員による自作のものであれば、学習者が効率よく情報を整理する教材として理解し易く作る力、そして上手く説明する指導力が問われる。そして、彼らが新しい単語や表現方法をあらゆる角度から眺め、あれこれ試行錯誤する時間や自由が与えられなければ、これらの単語や表現方法が記憶の深いレベルで保持され、Intake が目指す自由自在に使われるまでのレベルに至らないだろう。上手く活用できなかった場合、学習者の情報の整理に導くどころか、学習者を混乱に陥れてしまうのである。しかしながら、しっかりとここで情報処理を支援することで、自らの知識となり、次の Output でそれをより自らのものにするすることができる。

3. Output 時の補助教材

Output の役割はすでに与えられた知恵の活用による言語習得の相互作用である。そこで Output Hypothesis に、Swain (1985) は理解可能である Output とは、より正確で、一貫性があり、適切であるということである。また、Output の機能として、三点指摘されている。練習により流暢さを促進する、気づきを促進する、仮説を立て検証することである。日本の英語学習環境で、Output の重要性が指摘されることがあるが、Swain (1985) の The Output Hypothesis(アウトプット仮説)に、理解可能な Input

を十分に浴びているイマージョン・プログラムの学習者に対して立てられている点がある。よって、しっかりと行われた段階で Output は役割を果たすのである、では Output は授業の間いつ行われるのが最適だろうか。David(2003) は探究のサイクルで Challenge (挑戦) の後に Play (演習) と Link (関連付け) があると論じている。学習者は情報を自ら整理すると、目標表現に対し、さまざまな学習活動をこなすことができる。試し、間違い、試行錯誤を繰り返し、新しい例に出会い、そして自分の意思を表現することができる。もし成功すれば、彼らの頭の中に構築されかけている文法モデルに新しい表現を関連付けようとするだろう。こうして知識が自ら活用することで知恵となり、内在化するのである。自分の中に深く取り込むことで、この先出会うであろう新しい言葉の内容にも活発に利用されるのである。このように整理された情報によって目標表現を活用する点と、Intake の次に起こされる点から、授業の後半部分のアクティビティに Output が相応しいと推測できる。ではこれにいったいどんな教材が適しているだろうか。

Intake で情報が処理された後の学習者にとって、情報を知恵に発展させる活用のためには、自主性が求められる。そこで副教材開発の 1 つ目の留意点として自己責任・自己決定・自己選択を与える教材が必要である。これは複数選択肢があればどれを選んでも間違いではなく、選択肢がなければ回答を学習者に委ねることである。例えば、カードを使ってこの留意点を利用してみよう。答え無しにカードの裏に Why や How を使った質問を用意し、このカード使ったアクティビティを行えば、学習者に自ら考えた回答を聞き出すことができる。このように学習者が自ら考える教材は積極的な学習環境を生み出すことができる。そして、教師中心の指導から、学習者中心の指導になり、自律性がはぐくまれていくのである。また、協同的学習を促す教材も 2 つ目の留意点になるだろう(三浦・深澤他, 2009)。例えば、その留意点に沿った活動に適した教材の 1 つとして地図がある。目的地までの経路の質疑応答などは英会話表現を身に着けるためであり、教科書にしばしば見られる単元である。このような単元では会話を使ってたくさん活動させるためにペア活動で地図を使い、経路を尋ねる者と経路を伝える者に役割分担し地図を活用するとする。そうすれば地図を使うことで場面設定ができ、いきいきとした会話表現が行われ、学習者は自ら Output することができる。

Output 時の教材は学習者の言語習得の質の良否を決定づける。よって学習者の意欲をそがず、高められた知識を維持したまま、活用させ彼らの知恵となるかは教員にかかっているのである。学習者が新しい目標表現を活用することができない場合は、教員が学習活動の焦点をあまりに狭く絞り込みすぎているというのが 1 つの原因だろう。また教材をじっくりと見つめる時間が必要である。Output に与えられる教材は、知的好奇心を刺激するであり、ある意味混乱させるものである。それを Intake よりも自ら紐解かせ、考える時間を与えることが Output の浸透であり、自分の物にできたという感覚を作り出す。このように Output のニーズに合った教材は学習者を言語能力の習得に近づけるものである。

III. これからの補助教材

1. 電子機器から生まれた映像教材

グローバル化はもちろん、情報社会化となっていく中、教育にもメディアがよりいっそう取り入れられていくだろう。また本学でも 2012 年度の入学生から積極的にタブレット端末が一部の授業積極的に取り入れられ、最先端の教育が行われている。学習支援やボランティアで訪ねたニュージーランドのクライストチャーチのある学校では、すでにパソコンとタブレット端末をホームルーム教室に取り入っていた。そこでは、子どもたちは授業や宿題にも活用し、教員は授業だけでなく、出席管理から成績処理まで電子機器で行っていた。教室の全員分用意されていなかったが、グループごとでノートパソコンが与えられ、インターネットが早く繋がり、子どもたちにはタイピングゲームや神経衰弱など、勉強できるゲームが多量にそろえられている。子ども達は楽しみながら学習することができるのである。そして子どもたちは自らわからない単語をパソコンですぐ調べることができる。私が日本文化について授業を行った時も、「もっと画像を見たい！」とパソコンを使って調べていた。子どもたちの興味から生まれる疑問に答えることができるのである。そして、教室には大きなテレビがあり、教員は動画サイトを利用してパソコンとテレビを繋ぎ、資料として動画を見せることもあった。このように電子機器を導入した教育現場でのメリットは、作る教材と違って教員は簡単に補助教材を準備することができる点があげられる。また、成績処理も行いうことができ、他の教員達と共有することができる。そして紙をできるだけ使わず、ペーパーレスである点は環境にも優しいと言えるだろう。電子機器は教材を利用することは学習者と教員の両方に分かりやすく、そして手軽で便利なツールなのである。

2. これらの課題

利点がある一方、パソコンやタブレット端末の電子機器には課題がある。それはコスト面である。やはり教科書などの教材とは違い、はるかに値段が高い部分、全員が所有するとなると学校側にも負担がかかる。そして、これらの電子機器を教育に取り入れられるとなると、自宅でも使いたいものだ。しかし、私がボランティアで尋ねたニュージーランドの小学校の児童達に「パソコンやタブレット端末を家に持っているか。」とクラスの児童に尋ねたところ、ごくわずかに所有していない児童がいた。また、タブレット端

末と教科書教材との1番の違いは画面か映像かである。教科書や紙の教材は自ら書くことができるが、電子機器は学習者自身を書くということできない。つまり、機械によって情報を整理されているため、自ら考える時間が少なくなってしまう。逆に、授業は手軽であっても制作に時間と苦労が求められるだろう。また、教員自身が使いこなせなければ、学習者も使いこなすことができないだろう。教育現場にコンピューター・リテラシーなどの問題で、ネットワークを用いた協同的学習には膨大な時間が必要とみている。そして、近年多発しているデータが盗難されるという事件である。何百人もの学習者の情報を狙い、電子機器が奪われてしまうのである。またデバイスであるUSBメモリーは非常に小さくコンパクトであるが、紛失してしまう可能性もあり得る。よって確固たる情報漏洩対策が必要不可欠である。このように課題はまだ山積みであり、議論と改善の余地がある。しかしながら、これらの難題をクリアし、教員が機能を使いこなせたとき、学習者への知識の深化に大きな効果をもたらすだろう。

III. まとめ

教員が良い授業を行うためには、周到的準備が必要である。それによって教員は自信を持ち、リラックスして授業に臨み、また学習者に効果的な時間を与えることができる。指導案を立てた時、教員は中心的に学習する目標表現、この目標表現が前回と次回にどうつながるか、学習活動はもちろん、必要な設備と教材や教具を考える必要がある。しっかり時間をかけて教材を準備することができたなら、スムーズかつ柔軟性のある授業を展開することができるだろう。そして、教材は学習者の知的好奇心を刺激し高める補足的情報は時々思い出されるものであり、学習の中心部分にもなりえる。導入、展開、そして整理と流れのある授業の中で、その時々タイミングよく与えられる教材こそが知識の内在化の成功に導く最大のツールである。心理学者のヴィゴツキー (Vygotsky, L. S.) は「学習者は自分自身で自分の能力を最大限に伸ばすことはできない」と述べている。もし、副教材なしの説明中心の授業だと、学習者は受け身のままで自ら学習する時間がなく、結果授業は全くつまらないものになるだろう。つまり、いかに授業において教材を最大限に活用するかが学習者の学びの仕上がりを左右させる鍵であると言える。加えてタイミングと多種多様の教材を活用する創意工夫が非常に教員に求められる素質の1つである。変化し続ける英語教育の形態や、学習者の求める理解し易い授業を研究し、これからも教材と向き合っていきたい。

引用・参考文献

- 安彦忠彦・新井郁男他 (Ed.) (2002)『新版現代学校教育大辞典 (2)』東京：ぎょうせい
- 田井恵津子 (2002)『intake の向上を目指した授業の実践報告：2種類の教材を使った英語 I の取り組み 2種類の教材を使った英語 I の取り組み』金沢大学
- 田崎清忠 (Ed.) (1995)『現代英語教授法総覧』東京：大修館
- 三浦省吾・深澤清治他 (Ed.) (2009)『新しい学びを開く 英語科授業の理論と実践』京都：ミネルヴァ書店
- 文部科学省『教科書とは』Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. 検索日 2014年2月1日 . http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/gaiyou/04060901/001.htm
- 文部科学省 (2008)『中学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂
- 和田千才 (2012)『小学3年生から英語教育、本当に効果あるのか?【争点：教育】』The Huffington Post Japan. 検索日 2014年2月1日 . http://www.huffingtonpost.jp/2013/10/22/start-english-education-at-the-third-grade-level_n_4146838.html
- Paul, D. (2003). *Teaching English to Children in Asia*, Hong Kong: Pearson Longman
- Reinders, H. (2012, April 8). *Towards a definition of intake in second language acquisition*. *Applied Research in English*:1, 2, 15-24
- Swain, M. (1993). *The output hypothesis: Just speaking and writing aren't enough*. *The Canadian Modern Language Review*, 50, 158-164
- Sunshine SUNSHINE ENGLISH COURSE (3)*. POWER-UP Speaking 2. pp.22-23. 食事 (レストランで). 東京：開隆堂出版 .
- NEW CROWN ENGLISH SERIES (1)*. Lesson 8 Not So Long Ago. pp.112-119. 東京：三省堂

ボランティア協力先

Halswell School, 437 Halswell Road Halswell Christchurch 8025 New Zealand